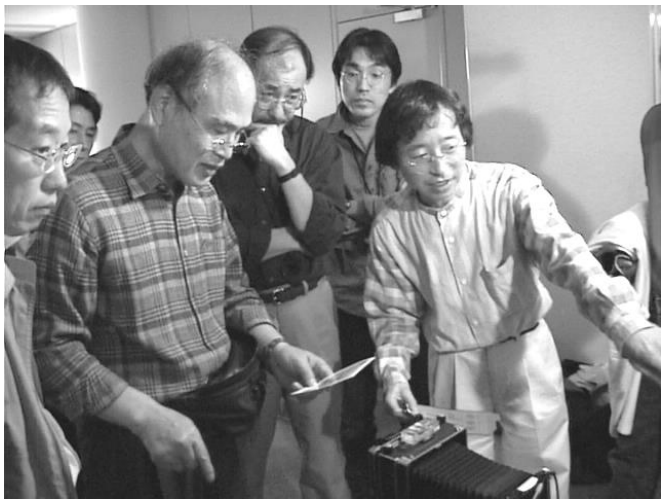
Photographic Society of
Zone System

ゾーン・システム研究会会報
発行日：2001.7
発行者：中島 秀雄
編集部：内田順
編集レイアウト：荒井 崇

NO.19

CONTENTS

・展覧会準備期間近づく
・鈴木秀ヲ先生講演会
・鈴木秀ヲ先生静物写真ワークショップ
・内田順氏作品がオリエンタル印画紙広告に採用
・石原さんと内田さんの展覧会を見て
・Tube による Film 現像体験記
・インフォメーション



展覧会準備期間近づく

中島　秀雄

今年も、そろそろ展覧会の準備に取り掛からなければならない時期に来た。

創作的な作品作りを目指すということで今年はスタートし、鈴木秀ヲ氏による講演や作品鑑賞、そして、撮影会も行ってきた。初めてのことで戸惑いもあり、また氏独特のオブジェ写真は好みの問題もあるが、これをきっかけに自分なりの静物写真に取り組むきっかけになればいいし、研究会を深めていく上でも必要なことだと思っている。人間は地球上に様々な物を作り出してきた。そして、いまその処理に困るほど物が溢れるる時代がきた。どこか遠くへ行かなければ写真にならないと考える前に、身近な物に興味と関心をもって接し、観察し、再構成することで神秘や美しさを発見することも大変刺激的だ。

毎年行ってきた展覧会場のオリーブが、様々な理由から閉鎖になり、我々は新たな会場探しに追われた。私は適当なギャラリー5 箇所を回り、他の役員にも呼びかけた。場所、大きさ、ギャラリーの理念、写真に対する興味と関心、値段等を考え、青山にあるギャラリー青山に決めた。この場所は、私も個人的に展覧会をやってみたいと思っていたギャラリーの一つで、現代アートを中心に活動している。駅にも近いし、回りにギャラリーもあり、開放的な内部空間も気にいっていた。オリーブと比べ壁面は大きいように思う。白い壁に照明はスポットライトで設備も十分、以前から我々が望んでいた空間でもある。また、通常は 6 日間を一単位として申し込むが、我々の要望でもある 10 日間もＯＫしてくれた。（実際には月曜日が休廊なので 9 日間）

昨年の東京写真文化館で行われた展覧会のいいイメージを持続していきたい。それには会員みなさんの熱い作品が必要です。残り 2 ケ月あまりの間に素晴らしい作品を期待します。尚、静物撮影会をもう一度行うことにした。前回うまくいかなかった人、参加できなかった人はチャンスだ。もちろん風景写真でもいいのです。様々な場所に出向くチャンスはまだある。会員同士誘いあって撮影にいくこともいいし、時間が合えば私が同行することも可能だ。

今回も、ファインアートフォトグラフィーのすばらしい展覧会にしよう！！

今年は、私の個人的な興味から米国撮影を予定し、そのことが頭から離れなかった。それも 6 月にようやく終わり、ネガの整理やプリントの準備にこれから入る。今回の米国撮影については別の機会に会報に載せたいと思うが、帰りにアダムスギャラリーに立ち寄り、内部の様子をうかがってきた。カラー写真が少し増えた印象だが、日本のようなデジタル写真の騒ぎなど全然なかった。私は、アラン・ロスのプリントを見てメモを取っていたが、係員が言うには、このプリントは贈り物としてよく売れているといっていた。今回も、すばらしい撮影だったことをとりあえず報告します。

鈴木秀ヲ先生講演会
（2001.2.4 総会にて）　　荒井　崇

２００１年２月４日、ゾーンシステム研究会総会後のイベントとして、写真家である鈴木秀ヲ先生の講演会が開催された。

鈴木先生は、東京造形大学の講師をしながら作品を制作されており、そのユニークな題材を用いた静物写真は、海外でもその作品が紹介されている。

先生は幼い頃、がらくた集めや絵が好きで、当初は絵書きか造形作家をめざしたという。しかしながら、写生のための写真をとるうちに、新鮮な感動を残すためには写真のほうが適していることに気づいて写真を志すようになった。

当初、森山大道、中平卓馬にあこがれて、粗粒子のスナップ作品を撮っていたそうだ。造形大学卒業後は、広告写真、週刊誌写真、そしてビニ本写真まで手がけたらしい。そのうち娘さんが誕生するのをきっかけにそれらの仕事をやめていく。

先生が静物写真を撮影するようになったきっかけは、友人から、ギャラリーのオープニング展を依頼されたこと。テーマが無くて困っていたとき、たまたま物置きで見つけた少年時代の地球儀、実験道具などを撮影。写真展はとても好評だったという。少年時代の興味と写真がうまく合致して、表現したいことがようやく形になったと感じたそうである。

以下、鈴木先生がスライドで解説してくれた代表的な写真を紹介する。

小さなナビゲーター

１．小さなナビゲーター

鈴木先生の写真集「Ｐａｔｅｒ　ｎｏｓｔｅｒ」の表紙になった写真。
地球儀の球体部分をあえてはずして、本の丸い世界地図と合わせこんで撮った作品。右下の子供は、鈴木先生のセルフポートレートをイメージしたそうだ。一見するとわからないが、本を下に置いて、上から俯瞰して撮影したそうである。

夜遊び

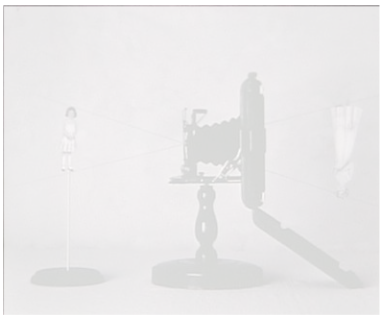
２．夜遊び

鈴木先生は、２０個もの地球儀を持っているそうで、こういったガラクタものは、よく粗大ゴミの日に探しに行く。特に春先は、引越しシーズンで良い出物があるとのこと。
粗大ゴミに限らずガラクタものは、東急ハンズに売っているものでさえ見つけたときに手に入れておかないとすぐになくなってしまうので、要注意だそうだ。

３．有翼の天文学者

中国雑貨店に売っている人形にルアーフィッシング用の擬餌を貼り付け、顕微鏡の鏡筒部を望遠鏡として使った作品。

有翼の天文学者



曖昧な遠近法

産業の曙

４．曖昧な遠近法

カメラをモチーフにした写真。レンズの光学系をイメージしたもので、背景は墨汁を染み込ませたスポンジをたたいて模様を作成したもの。

５．産業の曙

鈴木先生の作品には、よく古い理系の洋書が登場する。これは蒸気機関の本で、イラストを生かして産業革命のイメージを作りたかったそうである。

６．マンチェスターの寒い朝

これは何と、イギリスの子供向け蒸気機関学習用おもちゃだそうだ。この教材は、煙突から煙は出ない構造であり、実は１m先に綿を垂らして煙に見立てたとのこと。中国返還前の香港では、この手のガラクタが二束三文で大量に売られていたそうだが、返還後突然売れ出して数が減ってしまった上に値段も高騰してしまったらしい。

マンチェスターの寒い朝

撮影は２１０mmで、煙をぼかすため絞りは空け気味。クロームメッキ部の写りこみを考えて前方斜めにトレペをセットし、トレペに穴を開けてレンズを出し、トレペ越し斜め上前方からボックス型ストロボ１灯でライティング。

不眠症のメアリー・シェリー

ちなみに鈴木先生の作品は、ほとんどがボックス型ストロボ１灯だそうである。

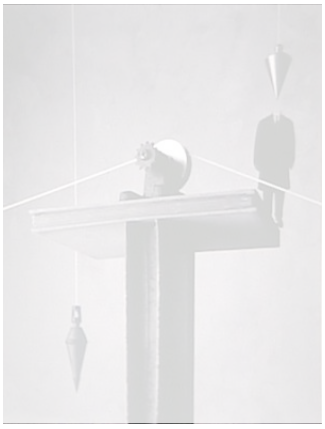
７．不眠症のメアリ・シェリー

下に横たわる人形は、１９６０年代のバービードール。当時、鈴木先生のお父様の会社で景品用に用意したこの人形が余ってしまい、家中バービードールだらけになってしまったという。今では一体８万円もする代物になってしまったが、当時はいかにして処分すべきか悩んだらしい。ちなみに親戚の女の子は、だれも欲しがらなかったそうである。

８．神話の頃

自作のピンホールカメラで撮影した作品の撮影風景。２４００Wストロボで、何と２４回フル発光したそうだ。

神話の頃（撮影風景）



アレクサンドリアの測量技師

９．アレクサンドリアの測量技師

燃えてしまった古代エジプト時代のアレクサンドリア図書館を再建しているイメージ。鈴木先生は、自分の妄想を膨らませないと作品が撮れないとのこと。必ず作品には先生によるストーリーが存在する。

１０．永遠の安息

剥製のカブトガニを撮影したもの。鈴木先生は、カブトガニが大好きだそうで、特に後ろから見た感じを気に入っているという。本の上に置いて、後ろ姿がみごとにアレンジされている。

１１．水晶のささやき

水晶を、開いた本の前に置いて撮影した作品。鈴木先生の作品には珍しく、タングステンライト（ピンスポットライト）を使用。本内側の裏と、水晶背面にアルミホイルを貼って輝きを表現している。また、バックの紙は、撮影の時自分でゆすっているそうだ。

永遠の安息

１２．シリーズ「オプティカル・アーカイブ」より

甲虫類の好きな、知り合いの編集長に頼まれて撮影した写真。光の線は、ペンライトでなぞったもの。虫ピンが見えるが、あえて虫ピンを見せたそうである。

ところでこの作品は、筆者（荒井）が昨年、鈴木先生の写真展にてプリントを購入したもの。とても気に入っているにもかかわらず、嫁さんが甲虫類を苦手としているため部屋に飾れなかった。大変悔しい思いをした作品である。

水晶のささやき

ｼﾘｰｽﾞ「ｵﾌﾟﾃｨｶﾙ･ｱｰｶｲﾌﾞ」より

１３．アリスとフランケンシュタイン

不思議の国のアリスをテーマにシリーズで制作しようとしている作品の１つ。光線のラインを出すため、水槽に沈めてガラス越しに撮影。水中の気泡を取り除くのに、何と３日間も費やした。気泡を減らすには、一度沸騰した湯を冷まして使うと良いらしい。なお、フランケンシュタインのプラモデルは、質感を出すため、カラーで塗装したそうである。

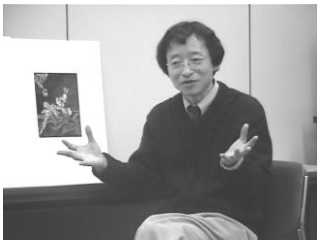
アリスとフランケンシュタイン

スライドレクチャーの後、鈴木先生のオリジナルプリントを見せてもらいながら質問に答えて頂いた。

鈴木先生がイメージ作りをするための手法は大きく２つある。１つは物に触発されて湧き出るパターン、２つめは、本を読んでいたりしたときにインスピレーションが浮かんだとき。後者の場合、イメージはあるにもかかわらず物が見つからず、未だに撮影できないものが多いとのこと。物が見つかるかどうかは、まさに出会いであり、運、不運の問題だそうである。

鈴木先生の写真を、コマーシャル用として使うことは不向きなのだそうだ。コマーシャルの写真には闇があってはならないとのこと。（ちなみに影はあっても良いのだそうだ。）確かに鈴木先生の写真は、一部グロテスクな面が垣間見れる。また、そこにこそ魅力があるのかもしれない。

今回、鈴木先生の作品にまつわるエピソードを通して、先生の作品が持つ高い創造性は、先生自身の内面から湧き出る独特の物語に依ることがわかった。
また、その高い創造性を持ちながら、シルバープリントのクオリティーも非常にハイレベル。多分、鈴木先生のような作品を作れる人は、今後とも現れないのではないだろうか。



鈴木秀ヲ先生静物写真撮影会
（2001.4.15）　　荒井　崇

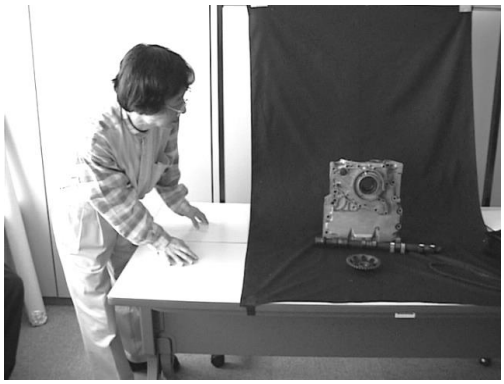
去る４月１５日、前回講演をしていただいた鈴木秀ヲ先生を招いて、静物写真撮影会が行われた。（場所はランドマークタワー１３Ｆ会議室）

今回は、参加者が愛着のある物を持ち寄り、鈴木先生の指導で撮影する。というやり方で、自然光２ヶ所（窓際）、タングステン１ヶ所、計３ヶ所のブースを設置。会議室スペースをフルに使って撮影を行った。

また、写真収集家である佐久間氏も撮影者として参加。車のエンジン部品、人形の部品等、珍しい被写体の提供もあり、素材のほうもバラエティーに富んだものが集まった。

静物写真の最もむずかしい点は被写体への映りこみ。トレペで囲うなど大変な苦労をしながら撮影開始。鈴木先生の話によると、カメラ側からピンスポットライトやレーザーポインタを使って映りこむ場所に当てると、ライトの位置にあるものが映りこみの原因でありことがわかるそうだ。

バックは、布や紙を使用。中には、黒いバックペーパーに穴を開けて窓際に設置し、星をイメージした人もいた。



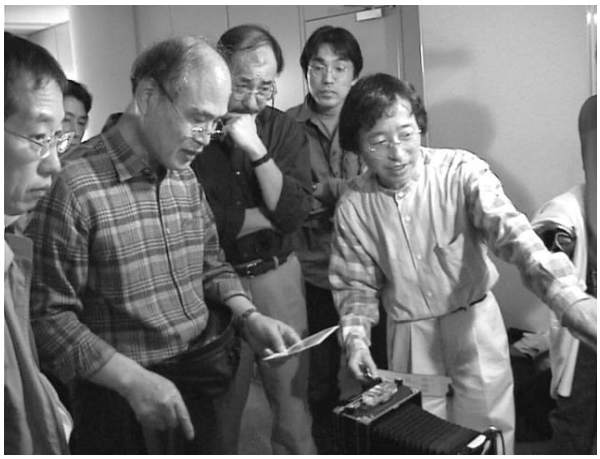
鈴木先生は、アイデアを練るために普段アイデアノートを付けていて、スケッチ、素材などのメモを欠かさない。お酒を飲んでリラックスし、アイデアノートを前に置いてスケッチすると、特によいインスピレーションが湧き出るという。

静物写真は光の使い方が重要で、街中のレストランなどの照明アレンジなどを、日頃から観察しておくと役に立つとのこと。

撮影に関しては、長いもので１週間かかるものもあるそうだ。また、モノクロとはいえ、トーンを分離するため、フィルターもよく使うそうである。

今回、鈴木先生を招いたことにより、技術的なことはもちろんのこと、作品のイメージ作りにも大変役に立つ撮影会になったと思う。

これをきっかけに会員の方は、もっとすばらしい静物写真を撮影してみたいという意欲が湧いたに違いない。



内田順氏作品が
オリエンタル印画紙広告に採用

先頃、ゾーンシステム研究会事務局担当である内田順氏の作品が、オリエンタル印画紙（サイバーグラフィック社）の広告に採用された。
以下に掲載した広告は、オリエンタルニューシーガルＶＣ－ＦＢの広告で、ゾーンシステム研究会写真展にも出品された写真が採用され、現在、ヨドバシカメラ等に置かれている。

また、２００１年春に行われたＩＰＰＦ〈プロフォトショー）のオリエンタル印画紙ブースでは、内田氏のオリジナルプリント（大全紙）数点が展示、サンプル用キャビネプリント数点も配られた。

現在、日本カメラ、アサヒカメラに掲載されているオリエンタル印画紙の広告にも、内田氏による写真が掲載。（これもゾーンシステム研究会写真展に出品されたネムの木の作品）大々的に広告として活用されている。

今回広告に採用されたきっかけは、内田氏が出品していたＪＰＡのグループ展。たまたま見にきたオリエンタルの方が、内田さんの作品を気に入ったため声がかかったそうである。

いつ何時、このようなチャンスが訪れるかわからない。常に質の高い作品を発表していくことがいかに重要かということを感じた次第である。

石原さんと内田さんの展覧会を見て

中島秀雄

今回の二人の展覧会は、毎年行われる研究会の展覧会会場の変更にともなう空白を補うということで行われたもので、事前に十分計画されたものではなく、二人にとってはその準備に大変なものがあったに違いない。

最近の石原さんは、写真を撮る合間に気功を始めたり、ハーブ栽培に動き回っていると思っていたら、料理にとりくみ、そして、講演もやったり、外国に行って仕事もこなしている。活動の範囲はとどまるところがなく、実に器用にこなしていると思っていた。今回の展覧会は石原さんの活動の基本的なテーマは何かを見ることにもなった。

会場は華やかな雰囲気に包まれていた。女性客が多いというわけではない。いつものオリーブのちょっとした緊張感とは違っていたのである。それは、ギャラリー正面に展示された淡いカラープリントや、石や小枝、植物や花といったフラワーデザインを思わせる巧みな会場演出にあった．束ねた小枝から吊り下げられたパステルグリーンのプリントが放つ光は特別で、会場入り口に立てば誰でもその光に引き込まれてしまう。

花やガラス、自然の風景を題材として展示されたカラープリントに、私はパステル画のイメージを強く感じた。よく見ると、和紙のようなペーパーにデジタル出力されたもので、ペーパーの程よい厚みと淡い色彩が、実景の強いイメージを和らげ、見ることよりまず心で感じることを優先させる作品のように思えた。パソコン処理されたとはいっても、石原さんの内側に確かなイメージがあってできることに違いないし、このペーパーに出会うまでに多くの試しプリントを必要としたであろうことも感じた。そして、自分のイメージが表出できるならなんでも取り入れてみる、という石原さん流の感性がここにある。

石原さんの展覧会１

石原さんの展覧会２

会場の石や植物、小枝や花を積極的にアレンジしたのもそれなりに理由があるに違いない。石や植物、木や花にはそれ自体で人間を癒す力があり、華道もそこから生まれていて、古来から日本の精神文化になくてはならない素材になっている。高度のテクノロジーに囲まれ、人間の本質を見失いかけている現代にあって、既成のアートワークを越えたところに精神の調和を求めようとする石原さんのテーマがここにあり、石原さんの様々な活動の意味も分かってくる。石原さんの作品をまとめて見るのは今回が始めてで、彼女の内側にはすでに引き返すことの出来ない熱い創作のベースがあることを感じた。

内田さんには、やっかいな研究会事務局を担当していただき、いつも何かと研究会の大きな力になってもらっている。そして、普段は会社勤めのサ

石原さんの展覧会３

ラリーマンで忙しく、それでも写真に関する研究に力を入れている。新しい印画紙やフィルム、レンズやカメラを密かに購入して自己表現のイメージを広げるための研究に怠り無い。私は時々内田さんが写真家だと錯覚してしまう。今回は、そうした忙しい合間にも写真は撮れるのだということを感じさせてくれたし、普段の研究の成果を見ることにもなった。どこで見つけてきたのか、今まで見たことも無い木製のフレームがすばらしく、モノクローム写真にぴったり調和し、写真の見せ方と楽しみ方の可能性を我々に見せてくれた。

写真の題材は旅先で見かけた穏やかな牧場や小川であったり、周囲に点在する見慣れたものが光のわずかな変化によって現れる美しさにカメラを向けている。いつもの研究会の作風とは少し違ったより細やかな眼差しのように思った。研究会の作風だけでは十分満たせない内田さんのもう一つの感性を見る思いだ。これらの写真を生み出す内田さんのカメラワークの秘密に、ローライフレックスや手軽に持ち運べる蛇腹式のスーパーベッサやペルケオといったある時代を風靡したカメラがある。それらを出張かばんに忍ばせ、カメラに対して尊敬の念をもって巧みに使うところに内田さんらしさを感じる。しかし、こうしたクラシックカメラを使っても、ファインアート

内田さんの展覧会１

内田さんの展覧会２

の写真意識は今回の写真を見ても分かるように変わることがない。それゆえに、あるときは周辺のピントを気にし、あるときはフィルムの平面性を気にし、カメラの弱点を知り尽くしながらなんとか作品を練り上げていくところに私は共感する。クラシックカメラだからピントはこの程度で許してという気持ちがもしあれば、アマチュアの趣味の写真になってしまう。中古カメラが人気を集め、クラシックカメラを持つ人は多いが、作品を作る人は少ない。アダムスやウェストンが使っていたカメラは、今を基準にすればクラシックカメラを使ってあれだけのすばらしい写真を物にしている。内田さんのようにカメラに対する尊敬の気持ちとファインアートに対する研究があれば成せるのだろう。

写真家ではない内田さんが個展を開くには、プロとは違うハンディがある。ここまでやれたことは次に続く研究会員にも大いに参考になるに違いない。撮影、現像、プリントまで立ち上げることは大変なことだ。写真への情熱がなければできないと私は思っている。

内田さんにはそれは十分備わっている。

Tube による Film 現像体験記

菅野　慶孝

Sheet Film の手現像には、バットによる皿現像、小型タンクによる現像、チューブによる現像があり、さらに各人の思い入れによりいろいろな Variation を加えて行われています。現像方法に我々が期待するのは、特別な Technique を使わないでいつでも現像ムラとキズのない Nega Film を得ることに尽きます。

皿現像にはトランプを切るように乳剤面を上にした Film を下から上に一枚づつ重ねていく方法（一度に 2 枚から 6 枚）や、Film をバットに入れてバットの４辺を交互に持ち上げて現像液を動かす方法（一度に１枚から４枚、Film の止め方で変わる）等があり費用も掛かりませんが、熟練しないと現像ムラとキズが出易い方法です。逆にいえば熟練してしまえば一番簡便な方法ですが、アマチュアには熟練するほどの量をこなすのは大変です。

小型タンクによる現像にはコダック方式（Film を１枚づつステンレス製の枠に入れ、現像液を満たした蓋のないゴム製タンクへ枠ごと入れたり引き上げたりする方法、一度に１枚から６枚）や、ラック方式（Rack に６枚の Film を挿入し、Rack 毎現像液を満たしたタンクへ入れたり引き上げたりする方法、銀一、ドイ、ＩＳＥ，Combi－Plan 等が販売しており Combi－Plan のものには Roll Film のタンク現像と同じく明室で現像できるタイプもあります）があり、キズの発生は少ないものの現像ムラが出易いと言う人もいますが、全く問題なく簡便に現像出来ると言う人もいて、使い勝手は人により異なるようです。

また、チューブ方式（Film を１枚づつ Tube に入れ、Tube に規定量の現像液を入れて手やモーターで回転して現像する）と言うと高価な Jobo の方式が浮かびますが、手回しでやるなら Tube の入手だけですみます。

今回は、Tube を使って現像をやっている人は少ないようですので単なる好奇心からチャレンジしてみました。理由はたまたま、８ｘ１０の Film 現像をいままで皿現像（２枚のトランプ方式）で行っていて現像ムラは出ないものの（厳密には解らないが）キズが時々見られたためです。キズは１枚づつ現像すれば出ないとは思いますが、実際の全暗黒での作業を考えると１枚では作業のリズムが取りにくいのでやりたくないと言うことがあります。今回入手した Tube はアメリカの The View Camera Store，Inc.（Phil Davis が主宰していた Darkroom Innovations の後継会社）の塩ビの Tube です。４ｘ５用のものは Tube ＆Cap ｘ６、予備の Cap ｘ６，撹拌用 Tube rack ｘ１がセットになっており＄155.89（約 19,500 円、送料別）で一本の Tube＆Cap サイズは 22.3cm ｘφ4.5cm ｘ厚さ５mm、重さは 170g です。８ｘ１０用のものは Tube rack は販売しておらず、Tube&Cap と Cap を入手してみました。サイズは Tube&Cap で 37.2cm ｘφ8.8cm ｘ厚さ９mm、重さは 1,100g です。価格は一本の Tube&Cap で＄69.95、予備の Cap が＄34.95、合計＄104.9（約 13,000 円、送料別）でした。４ｘ５用のものと比べると手作り丸出しで工業製品とは言えずハッキリ言って高いと思います。４ｘ５用のものは工業製品として仕上がっており妥当な価格だと思います。これも需要量の差でしょう。さて、使用後の感想ですが皿現像よりも安心して使用できると思います。現像ムラ、キズは少ない処理数ですが発生しませんでした。と思います。私の使い方の概略を以下に紹介します。

１．明室で

先ず、停止液と定着液は普段使用するバットに準備しておきます（ステンレス製の四つ切バット)。停止液の深さはTubeの直径の半分程度になるようにします。(四つ切バットに４ｘ５では２リットル程度、８ｘ１０では４リットル程度)。定着液は通常どおり Film が十分浸る深さを確保しておきます（四つ切バットに２リットル程度)。現像液は４ｘ５の場合は予備のＣａｐ当たり７０cc位、８ｘ１０の場合は予備のＣａｐ当たり２７０cc位を、温度を調節し易い容器（ステンレス製が扱い易い）に使用する現像温度にして準備しておきます。４ｘ５の Film を２０枚現像する場合では１，４００cc を準備すればよいことになります。現像液は１回使用したら捨てます。実際には現像液は現像時間を延長すれば４回位は使用できます。しかし、ゾーンシステムに従って撮影した Film をゾーンシステムに従って現像する場合は、テスト済みの条件で現像して期待した Nega Film が得られるわけですから現像液は１回だけ使用するほうが無難です。４ｘ５の Film を２０枚程度現像する場合では１回毎に使い捨てても現像液の総量は皿現像やタンク現像より少なくて済みます。

現像液を捨てるための容器を別に一つ準備しておきます。

Tube 現像は Film と現像液を密封した Tube を現像液と同じ温度にした水に浮かべて手で回転して現像しますので、Tube を浮かべて回転させることができる大きさのバットに現像温度と同じ温度の水を満たしておきます。４x５の場合は入手した Tube　rack を使用し、8x１０の場合は大四つ切のバットを使用します。

前浴をする場合は現像液と同じ温度の前浴用の水を、Cap をしない Tube を回転できる大きさのバットに準備しておきます。定着後の水洗促進剤の使用や水洗は普段使用しているものを準備します。

現像する直前に現像液とバットの水の温度を現像温度に調節し、現像液を予備の Cap に満たします。停止液や定着液も指定温度にすることが原則ですが多少の差は問題ない。と思っています。ただし、指定時間はできるだけ守るようにして、液の中に漬けっ放しにしないようにします。

２．全暗黒（または Dark Box or Tent の中）で

ａ．撮影済みの Film を Film　Holder から出し、乳剤面を内側にして丸めて Tube へ挿入し、Cap をネジって閉めます。N-1 や N+1 の現像を行う Film があれば Tube にラベルを貼ってマーキングをしておきます。

３．明室で

ａ．一回分の現像を行う Cap で閉めた Tube を仕分けし、Tube 回転用の水に入れて２、３分連続回転させ Tube の温度を現像液の温度に近づけておく。一度に現像を行う Tube の本数は両手を使った作業のリズムが心地よく取れる本数にしておく。本数を多くすると後の処理でキズを発生させ易い。４ｘ５で４本、８ｘ１０で２本が扱い易い。と思います。

ｂ．前浴用の水、予備の Cap の現像液、Tube 回転用の水の温度を確認し、必要ならば現像温度に調節して、それぞれの置き場所を、現像液を捨てる容器と合わせて全暗黒の中でもわかるように目をつぶり、手を動かして位置関係を確認しておく。特に、前浴を終わった時や、現像を終わって現像液を排出した後の外した Cap の置き場を確認しておかないと、暗闇のなかでパニックになり作業のリズムが乱れます。４ｘ５用の既成品の Tube rack は四つ切サイズのバットに似ており、

Tube 回転用の水と、現像液を入れた予備の Cap を６個置けるようにしてあり、予備の Cap は Tube 回転用の水で温度変化が少なくなるようにしてあります。８ｘ１０の場合は、既製品の Tube rack がありませんので Tube 回転用バットの手前に温度を調節した現像液を入れた予備の Cap を置きます。

私は使用していませんが、薬品で手荒れが生じるひとはこの段階で防水手袋をすると良いと思います。作業の途中で外したり、嵌めたりする煩わしさがありますが。

４．全暗黒で

ａ．回転用の水に入っている撮影済みの Film を入れた Tube を取り上げ、Cap を外し、前浴用の水に Tube ごと漬けて１分程度軽く回転します。外した Cap は流し台のあらかじめ決めておいた場所に置きます。

ｂ．前浴を終えた Tube から水をだし、軽く振って水を切り（強く振ると Tube の中の Film がずれて、重なってしまう時がある）、現像液を入れた予備の Cap に上からネジ山に沿って閉めそのまま立てて置きます。

ｃ．最初に現像する Tube を、Cap を下にして手に持ち、現像時間を合わせたタイマーをＯＮにします。タイマーは床の上に置いて光線が流し台の Film に直接当たらないようにしています。

ｄ．直ちに Tube を振り始めます。初めの３０秒程は強く振りますが、現像液をできるだけ時間差なく万遍なく Film に行き渡らせるのが目的ですから、現像液がよく四方八方に動く方向を考えて振ります。あまりめちゃめちゃに強く振ると中で Film が重なりますので注意します。４ｘ５は片手で振ることが出来ますが、８ｘ１０は重いので両手を使って振ります。

ｅ．振り始めて３０秒程経ったら Tube を回転させる水の入ったバットに入れ、Tube を回転させ始めます。Tube の回転は連続して行い、リズムを取って１０回位毎に逆転させます。Tube は回転中に不規則な上下運動をしますが回転運動と合わせて現像ムラの少ない Film に仕上がる理由と言われていますので、手で無理に押さえないようにします。

ｆ．現像終了時間の１０秒前にバットから Tube を取り出し Cap を上にして Cap を外し、Tube の中の現像液を予め準備してある廃液用の容器に空けます。直ちに Cap を外した Tube を停止液へ入れて４５秒ほど回転した後、停止液を Tube から排出し、Film を Tube から取り出して直ちに定着液へ入れます。

５．Dim Light（プリントする時の Safety　Light と同じ）下で

全暗室のｆ．項は Tube の開口部を下にして現像液を排出し、Film を暗室灯にじかに曝さずに停止液に入れて現像の進行を止める方法を取れば Dim Light 下での処理が出来ます。試した限りではカブリはありません。と思います。ZoneVI の Duo Safe を VC 側にセットし１８０cm 離れた後ろから白い天井へバウンシング照射して試してみました。

ａ．ここまでくれば目で確認しながら処理が出来ますので Film を複数枚バットに入れても、キズを発生させることはかなり少なくなります。定着液での処理は Film かプリントかを問わず、ある量を現像していると定着液のバットに長時間漬けたままにして置き勝ちですがなるべく指定の温度と時間を守ります。Film の定着には硬膜定着液で処理時間の短いフジの２薬の Rapid Fixer を３分で使用しています。メーカーの説明

書には書いてないのでどれくらい長く定着液に漬けておくと問題なのか解りませんが、長時間定着は現像により出現したハロゲン化銀を流出すると言われていますので、指定時間は守るようにしています。定着中は Film が定着液の中に完全に浸っているように注意し、最初の３０秒程度はトランプを切るように連続撹拌した後、３０秒毎に撹拌します。

Tube 現像では、Film の Backcoating が全面的に初めて触れる薬剤は定着液ですので他の現像方法よりも定着が終わった段階では Backcoating の落ちは悪いかもしれませんが、最終水洗が終わればピンク色は完全になくなります。

６．明室で

ａ．定着が終わったら手で Film を持ったまま水洗器で軽くすすいだ後、水洗促進剤のバットに入れます。最初の４，５回は連続撹拌して、後４５秒程漬けて置いて水洗器に移します。T-Max の場合はピンクの Backcoating の落ちが悪いので２分程掛けています。

ｂ．水洗はコダックの現像用ステンレス枠（Hanger）に入れて、水の流れを良くするように止め金は開けたままコスタイナーのプリント用水洗器に Hanger Separator を渡してそこにステンレス枠を置き流水で最低２０分水洗します。枠に入れて水洗することは Film の縁の水流が十分でないため良くないと言われていますので水洗時間を２倍行なっています。枠に入れないと水洗中に Film 同士が水流で動き、お互いが触れてキズが発生する恐れがありますのでこの方法を取っています。

ｃ．水洗後、そのままクリップに挟んで紐ハンガーに掛けて自然乾燥させます。フジの AG ガードがあれば１％ぐらいに薄めた液に潜らせてから乾燥させます。ドライウエルは Film には使用していません。ドライウエルの主成分は界面活性剤で、これを使って乾燥させた Film でプリントするときに、ガラスの Film Carrier を使うと、虹模様のニュートンリングが発生し悩まされことがあります。特に、湿度の高い季節に発生しやすいと思います。乾燥は特別な場所がありませんので、現像した場所で紐ハンガーに掛けた後は埃を立てないように出来るだけ早く部屋から退出しドアを閉めておきます。普通、一晩経てば完全に乾燥していますので翌朝ハンガーから外して Film File Sheet にいれて収納します。Film を扱うときは必ず手袋をします。

以上、Tube 現像と我流の Film 現像の方法を取り混ぜて書いてみました。多少なりとも会員各位の参考になればと思っています。Tube 現像の欠点は一度使用した Tube と Cap はよく洗い、よく拭いたあとにつぎの Film を挿入する必要があることです。この面倒を厭わない人は一度試してみたらいかがでしょうか。質問等は遠慮なくお寄せください。

Information

【売ります】

［中島秀雄］

１．コールドライト（引伸機用光源）
　ベセラー用アダプター付、光量セル付
　　中古　２５０００円

２．ポラロイド４ｘ５パックフォルダー
　　新同様　１９８００円

３．ピーク　引伸ルーペ
　　新同様　１９０００円

４．オメガ上皿天秤２００ｇ
　　新同様　　６０００円

５．８ｘ１０　Ｔ－Ｘ　２５枚入り　３箱
　　期限４月、冷蔵庫保管　　３９００円

［菅野慶孝］

下記中古品譲ります。
（1.と2.はまとめて引き取ってくれる方に）
（4.と5.は無料）

１．水洗器（Zone Ⅵ Washing Machine For １１ｘ１４）　ｘ１
　いわゆるバライタ紙のアーカイバル水洗器ではありませんが、プリント１枚だけならアーカイバル水洗が出来ます。　５０００円

２．Film 水洗 Rack（Zone Ⅵ Sheet Film Rack For ４ｘ５ or ５ｘ７）　ｘ１
　３．の水洗器と組み合わせて使用すれば、５ｘ７までの Film とプリントはアーカイバル水洗が出来ます。　４５００円

３．Viewing　Stand（Zone Ⅵ Wet Print Viewing Stand For １１ｘ１４）　ｘ１
　定着後のプリントを濡れたまま乗せてチェックするためのもの。　５００円

４．明室用現像タンクーRack 付き（Combi－plan For ４ｘ５ Film）　ｘ２
　１つは若干光線漏れをしますので、水洗用です。
　　２セットで０円

５．バット（King １１ｘ１４）　ｘ３
　　現像、停止、定着用　　セットで０円

【原稿募集】

会員の皆様からの原稿をお待ちしています。

［以下原稿投稿に関するお願い項目です。すみませんがよろしくお願いします。］

１．写真原稿は、紛失事故防止のため、できるだけネガやポジは避け、プリントでお願いします。

２．今まで同様、手書き文章はスキャナーでパソコンへ入力できないので、原則として受け付けません。以下いずれかの方法にて投稿願います。
　・ワープロやパソコンでプリントアウトしたもの、（スキャナーでパソコンへ入力します。）
　・パソコンの電子メール
　・ウィンドウズの Word2000
　・text ファイル
　（ちなみにこの会報は、ウィンドウズの Word2000 で作成しています。）
　ただし、どうしても手書き文章しか投稿できない事情がある場合は、事前に連絡をいただくようお願いします。

３．イラストは手書きでも結構です。スキャナーで取り込みます。

パソコンの扱いが不慣れのため、時々ご迷惑をおかけするときがあるかと思いますので、その際はよろしく御指導ください。

［編集者］

荒井　崇